ねばーる旅行記

浜渦ゼミで行ってきました！！

タトパン　　武木田千恵美

プーンヒルをあとにした私たちは、タトパンという温泉のある村に向かった。プーンヒルの標高が3194ｍ、タトパンの標高が1189ｍで2000ｍの高度差を1日で一気に下る。

下るにつれて、気温も上がるのか見ごろのしゃくなげがあちらこちらに咲きみだれ、ガイドのマニさんやポーターの方たちが私たちのためにとってくれたしゃくなげを手に快適な下り坂を下った。

ところで、しゃくなげという名前を聞いたことはあったけど、実際に見たのは初めてで、それもそのはず日本でもごく一部でしか見られない貴重な花らしく、得をした気分。赤やピンクのかわいらしい花をつける木だ。

途中からは下を見ると足がすくむような断崖絶壁あり、これ本当に大丈夫？というようなつり橋あり、のバラエティに富んだトレッキングルートで、トレッキング３日目の私たちの疲労もピークに達していたが、タトパニに着くと温泉につかれる、という期待で私たちはいっぱいだった。

何を隠そう私たちは、ポカラを出発してからというもの、ろくなお風呂に入れていなかったからだ。しかも、ネパールで温泉に入れるなんて夢にも思わなかったし、ネパールの温泉って？？という好奇心もあった。

そんなこんなでタトパニに着くなり、私たちは温泉に向かった。

川原に浴槽が２つ掘ってあり、みんなでさっそく水着に着がえてはいる。

気持いい！今までの疲れがふっとぶようだった。

また、これだけいろんな人種の人たちと同じ湯船につかれるような珍しいな、と思った。

つれづれなるままに・・・　　柳井友裕

ネパールでの珍体験である。卒業生がゼミ旅行に参加する条件として、

1　在学中、先生の（畑の）手伝いをしていること。←別に畑仕事に関わらず、研究のお手伝いでもよいです。しかし、私は肉体労働で対応しました。

2　後輩が就職活動で東京にくる時は、かならずたかられる、もといご馳走をすること。
←私の場合、「先生の紹介で…」という電話が毎年２月～６月頃知らない学生から入り、システマティックに食事をおごる構造ができている。

3　９連休させてもらえる会社に勤めること。

4　旅行するお金を常時用意しておくこと。

私は幸運なことに以上の条件を全てみたしていたおかげで、2000年３月に実施された「浜渦研究室ネパールトレッキングツアー」に参加することができたのです。

さて、これから私がこの「ネパールトレッキングツアー」を通して感じたものを「つらつらっと」書かせていただければと思います。

第一に、後輩のおもり。日常会社でペーペーである私なのですが、今回おちょくりやすい後輩＆お姉さん（誰？）を得て、まるで水を得たさかなのようにいじらせていただきました。「おもり」としたのは、後輩が喜んでおちょくられていたので。

第二に、山。三日目の朝に見たアンナプルナの山並には感動しました。丸二日間歩き通した介があったというものです。

第三に、経済の話ができたこと。日頃インターネット関連の仕事をしている私が、学生時代研究（？）していたアジア経済について日常触れる機会は日本経済新聞のみで（毎日読んでいますよー先生!!）、話す相手はいません。そのような中、このネパールツアーで私が一番嬉しかったことの一つに、日頃新聞で得た情報を元に自分の考えているアジア経済に関することを披露する機会を得られたことです。（これほんと）

その他にも、毎日夜ウィスキーを飲んだことや、プロレスをしたことなどいろいろな楽しい思い出がありますが……。

最後に一言。先生ありがとうございました。と、浜渦研究室で本当に良かった。（やろ？武木田、戸川!!）

ネパールでの食事　　戸川　純子

食事は旅先での大きな楽しみの一つ。ネパール料理も私たちの期待に十分に応えてくれました。最初に出会ったのはモモという料理。カトマンズ空港のレストランで出されたそれは、一言で言えば“カレー味の餃子”！インドとチベットの間に位置するネパールでは、カレーあり、餃子あり、チベット鍋なんていうのもありとバラエティにとんだ料理が楽しめるのです。チベットとインドの食文化のいいとこ取りといった味に私たちは「これぞネパール!!」と感激しました。

次に迎えてくれたのがスパイスの効いたミルクティー“チャイ”です。ポカラのホテルでウェルカムドリンクとして出てきました。紅茶をミルクで煮出したもので、各家庭やレストランでスパイスの味付けも違うようです。この旅では至る所で毎日のようにチャイを飲みましたが、少しも飽きませんでした。

そして最高だったのはやはりトレッキング中に山小屋でとる食事です。慣れない山歩きでクタクタの私たちにとって、何にも代え難いご馳走でした。特に、ヤクのチーズ・野菜・ヌードルの入った栄養満点のスープはおいしい上に疲労回復に最適！凍えるような寒さの中で飲んだスープの、身体に浸みわたるようなおいしさは忘れられません。

しかしネパールでの食事をとおして考えさせられたこともあります。私たちが食べたものは全て、現地の人々が険しい山を開いて牛や人の力だけで育てた農作物です。さらに輸送手段はロバと馬。食料以外に水や油・日用品を背負って山道を往復します。余す所無く切り開かれた山や農作業を手伝う痩せた子供達を見て、与えられた食事に感謝せずにはいられませんでした。

最後にもう一つ。ネパールでは週に一日電気が来ない日というのがあります。決してその日にヨーグルトなど要冷蔵の食品を注文してはいけません！さもないとひどい目に遭いますよ、私のように…。

大学を創る

教育改革は今に始まったことではないが、頻繁に教育改革が様々なところで議論されるようになった。その中では、「教育って何なの？」「大学って何なの？」という疑問も起こっている。「独立行政法人化」（以下独法化）という波が押し寄せてきているのである。広島大学も例外ではない。広大フォーラム32期1号（2000年6月1日発行）でも、独法化についての意見が特集として取り上げられた。直接的な影響を受ける教官にとって、どのような改革が迫られているのかに敏感になる。ところが、ほとんどの大学生についていえば、独法化という言葉を知っていても、その具体的なことを知らないのが現実である。ここでは、「大学を創ること」をもとに、1では「大学が変わること（大学の取り組み）」、2では「大学の中での大学生」、3では「今の学生」の3点でまとめてみた。できるだけ多くの人が「大学」を意識し、肯定的でも否定的でも、それぞれに意見をもってもらいたい。

1．大学改革の中

（1）高等教育までの教育システム・プログラムの変化

小学校では総合学習、ディベートなどの時間ができてきている。あと2、3年先にはカリキュラムの内容を減らすと共に「ゆとり」の時間を増やすという。そして、大学と同様に完全週休2日制になる。中学でも選択授業が増え、中高とコンピュータを学ぶ時間が増える。各学校で学期ごとの時間割もある程度自由に組めるようになる。また、単位制高校や中高一貫教育の実験的取り組みが行われている。現在このように大学へ進学する課程からも改革が始まっており、大学でもそれに合わせたカリキュラム改革が行われることは避けられない。

（2）入学制度の多様化

一部の大学では、大学3年でも卒業を認めかつ院にも入学できる制度、高校2年からの飛び級入学など、学業が優秀であればこれまでの階段を飛び越えることも可能になってきている。（広島大学でも前者に対して検討があった。）現在ほとんどの大学で取り入れていることに外国人特別入学、社会人入学がある。広島大学では、それに加え、平成12年度より注1）夜間の大学院の設立し、注2）フェニックス入学制度を新たに設けた。また、留学や社会人に合わせた秋季入学も検討を始めている。入学制度の多様化は、あらゆる人に開かれた大学を目指すとともに、一方で一般学生への刺激をも意図している。

注1）大学院社会科学研究マネジメント専攻。33人が2000年4月27日入学した。

注2）生涯学習として、高齢者の学位習得を目的とする。

（3）授業料の変化

「独立採算方式」が適用され、大学が自己収入を確実に得られるとしたら、まず考えられるのは授業料の見直しであろう。現在、国立大学の授業料は年約50万円。10年ほど前は約30万円ほどであった。1998年より授業料のスライド制が導入され、在学中でも授業料の値上がりがある。大学の自主的な資金調達が大きな課題となる。国からの補助金が少なく、採算が取れなくなってしまう大学は、かなり割高な授業料になる可能性もでてくる。授業料が払いきれない学生に対してはローン型での納入もあり得るかもしれない。

（4）授業のあり方

現在、大学は在学4年間を教養と専門に分けている。一般教養にとらわれていると専門教育が疎かになる、専門教育ばかりしていると専門学校と変わらない、といった問題点を抱えながら教育カリキュラムが改正されている。

カリキュラム改正の一方で、広島大学では、授業評価については、1）学生評価、2）学内評価、3）外部評価の3点から見直しを行っている。また、学業低下を避けるため、成績評価の仕方や成績評価の基準を設けることの模索を行っている。

（5）学問への評価

独法化が適用されるようになれば、既存の学問でも人気がないものや、評価の低いものは廃れてしまう危険性も有る。1つの理由は研究費確保が必須の課題となるからである。2つ目は長い目で見る機会が少なくなり、目先の利益に囚われてしまうかもしれないからである（教官も学生も）。学問への評価については、よく考えておかなければならない。

（7）開かれた大学

これまでは大学教員が公務員であるという性質上、企業との繋がりには厳しい規制があった。そのため、企業との共同研究は容易ではなかった。これからは大学での研究が社会で応用されることが大きく期待される。注3）サイエンスパークで見られるように共同開発を盛んに取り組んでいくことが大学の果たす役割である。

また、社会人（大学生以下の学生についても）に対しては、頻繁に公開講座やセミナーなどを設け、学問への意識を高めさせ、大学の社会への貢献を高めることも必要である。

注3）広島大学地域共同研究センター、公的研究所、民間企業の研究所が集積している。

（8）国際交流

共同研究や研究者・学生交流を深めるため、大学間協定がある。広島大学では、32の外国の大学と協定を結んでいる。広島大学総合科学部では、グダニスク大学社会学部とネバダ大学リノ校総合科学部と学部間協定を結んでいる。留学生の活発化を推進することで大学の相互影響を図ることができる。

（9）これからの大学

現在、大学は高度情報化、グローバル化、そして少子高齢への社会変化の中にある。これからの大学は、研究を中心とする大学、教育を中心とする大学、実践的な大学など様々なタイプの大学が出てくる可能性は大きい。国公立大学は、各都道府県にあることから、地域と密着した大学となりうることも大きく期待される。大学自身が大学を売り込むことも必要になる。なにより、独法化となれば大学が得る収益によって教官や学生への還元が変わる。現在解放されているオープンスペースも将来はどうなるかもわからない。そして、こんな様々な大学の中から自分の行く大学を選ぶのは学生である。

独立行政法人通則法：http:// www.kantei.go.jp/jp/cyuo-syocho/990427honbu/houjin1-h.html

＊本内容は平成12年6月に作成されています。以後、大きく内容が変更している可能性があります。

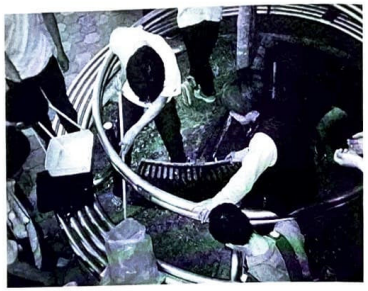
2．学生の創る大学

学生も

私達学生は１人１人が、広島大学に属している。大学を構成する１員なのである。私達は大学に対し何をしてきており、何ができるのか。大学への還元という形で私達学生は何をすべきかを問い、実行に移すことが必要なのである。

大学では、周りから自分の行動を強要されることはない。自分のとる行動は自らの判断に委ねられるのだ。つまり、学生は自分に対する責任を持つと同時に、自分のあるべき姿について多少なりとも考えなくてはならない。すると自ずとその土台となる大学に対して「こうあるべきだ。」「もっと、こうあって欲しい。」と思うだろう。これが“学生が大学を創る”ということの原動力なのである。大学改革が行われようとしている今、“大学が大学を創る”だけではダメなのだ。

“大学を飾る”象徴



現在、学生が大学を創っているといえることが最も分かりやすく現れているのは、大学生が主体の大学（又は学部）の名のつくイベントだろう。支援は大学によることも多いが、計画から後片付けまでほぼ全て学生が自分達でやるというようなものである。とても大変だが、学生にとって充実して貴重な体験だ。例えば、オリエンテーションキャンプ、ゆかた祭り、大学祭である。これらの行事はまさに学生が大学を創る行為の１つだと言えよう。予算確保から企画の細かい部分の全てに渡って準備し、そして、運営にあたる。責任が重大であるからこそ、その生み出す効果が大きいのだ。

他にも体育会や文団連をはじめとするサークル組織は学生中心となっており、広島大学の名と共に自主的な活動を行っている。

色濃くだそうよ、学生が創る大学を

しかしながら、前述のような例は、学生として自主的な活動を行っているが、学生が楽しむことが前提であり、あまり大学に貢献しているとは言えない。もっと大学に対し積極的に活動できる場があるはずである。ときには、大学に異論を唱えることも重要である。

個人に関してはどうだろうか。もっと個人個人として“自分達の大学”、“自分達が大学を創るのだ”と関心を持っても良いのではないだろうか。座談会という話し合いの場もある。そこで意見を交わして、自分が大学で何をしたいか考えてみるのもよいだろう。教官との議論の場も学生から提案していくことも必要なことである。そのためには、教官との協力体制を作ることも考えなければならない。

2についての飛翔最新関連記事：「大学に求めるもの」(54号、教育特集第２部)

3．今の学生

今の学生は

以前、「沈黙する羊たち」と今の学生は例えられた。自らの意見がはっきりと言えないのである。そして、和や協調を重んじ、和を乱すことが異端とされている。モノが活動的な時代であるのに、人が活動的でない。苦労をせずとも快適な生活を送れるほうが合理的だからである。多くの人が何に興味を持って良いのか分からないでいるのに、ただ与えられたことをするだけで、チャレンジすることが少ないのではないだろうか。

枠に囚われる学生

ここで枠に囚われるとは勉強は学校でするものと決め付けることである。生涯学習やボランティアは学内でするものではないのは当然であるし、自分の夢実現のためにすることは大学での単位習得だけにあるわけではない。大学生は、少なからずどこかに自由な時間を持っている。それをもっと有効活用すべきではないだろうか。

出口問題

学生は何の為に大学で学ぶのか。大学を卒業すると学生は就職か大学院の進学かを迫られる。好きな学問をしたいから進学、夢をかなえるために就職するのが理想である。しかし、現実はそうではない。希望するところには必ずしも就職できないし、実力が無ければ門前払いである。

インターンシップ制度があるが、これは企業がどんなものなのかを知る、社会を知るという点では実に有効な制度である。現状では、この制度に積極的になっているのは大学側だけである。就職センターを早い段階から利用している学生も少ない。

総合科学部では

総科の講義棟には他学部の学生が教養科目を受けに来る。当然、他学部との関係も生まれてきそうだが、しかし、他学部に多くの知人や友人を持っている人は少ない。総科は、学部内の繋がりが濃く、また、「総合」科学部であるから逆に総科で事足りるのである。

総合科学部の学生はあまり動かない、とある他学部の人は言う。確かに、他学部は、専門と教養で１日に自分の学部から総科まで何往復かする。それに対し、総科でほとんどの教養が学部で開講されているから総合科学部の学生は動く必要はない。そして、細則を生かして他学部まで専門の講義を受けに行く人も少ない。

総科は学際的な学部である。もっと環境を生かし、他学部との触れ合いをうまく利用すれば、総科の学際色をもっと濃く引き出せるのではないだろうか。教養科目の中にも理学部が中心、中には医学部が中心といったような講義が開かれている。そんな中で講義を受けるだけでも何らかの刺激が得られるはずである。

3についての飛翔最新関連：「流されて大学生」(55号　特集)

窪田幸子研究室

広域文化研究講座　助教授（A611）

先生の専門分野と現在の研究内容を教えて下さい。

オーストラリアの先住民であるアボリジニの人々の調査を継続してきています。夏休みなどの長期の休みを利用して、オーストラリアへ行き、共に生活することによって、さらに研究を深めています。ここ数年、カナダのイヌイットの調査もはじめました。アボリジニとイヌイットは、共に、狩猟、採集を生業としていること、そしてそれぞれ、オーストラリア、アメリカといった国民国家の中で、少数者の先住民として生活しているといった点で共通しています。今後、この二つの先住民を比較していけたらと思っています。

今の研究を始められたきっかけは何ですか。

大学時代は英語、言語学を専攻していて、同時通訳の勉強もしていました。これは面白い反面、すごく大変でした。ある時、ある教授の文化人類学の講義を受けて、興味を持ったんですね。そしてその教授といろいろ話をしている中で、「じゃあ、いっそのこと文化人類学をやれば」と勧められたことがきっかけで、今の専門に入りました。

ゼミの雰囲気はどのような感じですか。

特に今年は熱い学生が多いですね。「アイデンティティーとは」とか、「民族紛争はなぜ起きるのか」といったことを非常に一生懸命語るんですよ。皆、飲むのが好きな学生たちで、ゼミには遅れてくるくせに、飲み会には時間通りに来るんです(笑)。元気な学生が多いのは、私としては嬉しいことですね。

文化人類学といえばフィールドワークですが、ゼミ生の中にフィールドワークに行く人はいますか。

国内で調査をする人もいます。ただ、フィールドワークはできればいいと思うけど、事実としては時間的に無理なんですよね。調査をしたら、データを処理する時間が必要になるでしょうけれど、今の時期、皆、就職活動で忙しいでしょう。だから、学部生の間は、残念ながら文献で書く人が多いですね。

学生に対して一言お願いします。

どんどん教官を利用したらいいと思う。広大生は全般的におとなしいから、もっと積極的になった方がいいのではないかな。例えば、教官の部屋にオフィス・アワーなどを利用して訪ねてみるとか。ただ、今年の一年生は結構、授業中とか反応がいいと思いますよ。

(取材：滝波稚子　麓侑佳)

岡本篤尚研究室

社会環境研究講座　助教授　(A817)

写真左が岡本先生

Q　研究内容

- 専門は国家安全保障分野。
- 憲法政策論や憲法の規定について。
- サイバースペースにおける監視、盗聴法制。
- 情報公開法や平和関係の研究。

Q　これらの研究に興味をもったきっかけは？

院生時代の1980年代がきなくさい時代で、基本的人権より社会防衛の方を重んじる風潮になってきており、そのような社会状況に危機感を抱いたから。

Q　先生のこれからの目標は？

年に２・３回論文を出し、３・４年に一回本を出したい。

ゼミ生の中から博士号取得者を出したい。

Q　先生が常々思っていることは?

専門書を取り扱う古本屋やくつろげる喫茶店がないので早く山から下りたい。(笑)

Q　先生のおすすめの映画

２年くらい前に日本で上映された「エネミー･オブ･アメリカ」。高度の科学技術が駆使されている映画だが、登場してくる技術はすべて実現されているものである。それほど現代の科学技術はすごい。

Q　学生に向けての一言

自分の足で情報を手に入れて、自分で考えて欲しい。時間はかかるけれども、自分でやったものこそが自分に残るから。答えを見つけるまでのプロセスを大事にしてほしい。

<著書紹介>

- 『国家秘密と情報公開』　法律分化社（1998.3.30）6500円
- 『情報公開法』<共著>　三省堂　（1997.11.30）2400円
- 『オキナワと憲法』<共著>　法律分化社（1998.6.1）2700円

……買ってね。(だそうです。)

Q　先生の第一印象は?（研究室のゼミ生のお二人にききました。）

・のらりくらりしてそう、だけどやるときはやる。

・病弱そう。→（しかし、実際先生はヘビースモーカーで、ゼミ生はびっくりしているそうです。）

(取材：木島静香・北岡未紗)

大池真知子研究室

制作科学講座　講師（A409）

1．先生のなさっている研究内容を教えて下さい

アフリカの女性文学の研究です。主に英語で書かれた文学を読んで、それについて論じています。

2．研究を始めたきっかけを教えて下さい

もともとはアメリカ文学をやっていましたが、博士論文を書くにあたって、まだ研究の進んでいない文学の分野をじっくりやってみたいと思いました。文学者としての探求心が一番の理由ですが、ガーナ人の夫と知り合ったことも大きなきっかけでした。もっとも夫は、金のなさそうなアフリカ研究には反対で、「うまくいかなくっても俺のせいじゃないから」といつも言っています（笑）。

3．学生時代はどんな学生でしたか

本はもともと好きなので読書はしていましたが、大学は東京にあったので、文化を享受できる様々な機会（お店や映画、コンサートや美術館など）があって、遊んでいましたね。東京という街の中に、自分の空間を見つけられたと思います。

4．学生時代の貴重な体験はなんですか

文化の面でも、人間関係の面でもたくさんの出会いがある東京で過ごしたことは有意義だったと思います。

ーそして旦那さんとの出会いがあったわけですね。

そうですね。

5．研究室の雰囲気はどうですか

講義は少人数制が多くて、学生にとっては本当に恵まれていると思いますよ。

6．広大の雰囲気はどうですか

町はのんびり、のどかでいいですね。東京がいかに非人間的なところか、ここにいるとよく分かります。反面、自分で何かを探そうとして積極的に出歩くようにしないと、経験が限られてしまうかもしれません。それが広島という土地のいいところでもあり、悪いところでもあると思います。

（取材：松岡由見子　麓侑佳）

林　光緒研究室

写真正面が林先生

行動科学講座　助教授（A226）

研究テーマは？

昼寝（仮眠）の防ぎ方や改善、そして効果についてです。授業中にどんな人でも眠くなりますが、眠気の起こり方にはどのような法則があるのか、そして昼寝にはどんな効果があるのかなどについて調べています。今のところ10～20分間の昼寝が効果的だということがわかっています。どうやって昼寝を取るか、起き抜けの欠点などの研究を行っています。

どのくらいそのテーマで研究しているのですか？

4・5年位前から続けています。この研究はとても楽しいです。

どんな学生と一緒に研究したいですか？

やっぱり明るく元気な学生がいいですね。そして体力と意欲がある学生ですね。結構体力勝負なんですよ。多少のことにはへこたれず、なんでもやってみる。そんな学生と研究したいです。

今後の展望は？

研究三昧。とりあえず定年までは研究を続けたいです。その後はまた登山やバードウォッチングなどをしてのんびりすごしたいです。

先生の学生時代の様子は？

ナチュラリストの会というサークルに入っていました。毎週のように登山をして、バードウォッチングをしたり珍しい花を観察したりしていました。その他に学校祭で野草を調理して出したりしていました。あの頃は皆なんだかんだ言ってサークルに入っていたけどなあ・・。

今の学生に言いたいことは？

なんといってもいろいろな経験をしてもらいたいです。せまい人間（ちぢこまった人間）になってほしくないです。それといろんな人と接触していい人間関係を築いてもらいたいです。せっかくいろいろな人がきているのだから。大学は対等の関係で接することができる最後のチャンスだと思います。社会に出たら上下関係が結構厳しくなって本音が出なくなり、いい人間関係を築くのはむずかしくなる事が多いです。自分で処理、分析、まとめる能力を持って、自分で考えたことを人にちゃんと言えるようになって欲しいです。とにかくいろいろな人と接し、そしてみんなで何かをすることを学んで欲しいです。勉強も大切だからよく学びよく遊べ、ですよ。

（取材：山下純　北岡未紗）

永井克彦研究室

物質科学講座　教授　（C212）

写真左が永井先生

☆研究テーマは？

低温物性理論。わかりやすくいうと、温度が低く（絶対零度に近く）なれば、いろんな物質の特有な性質が出てくるというようなもの。具体的にはＨｅ３が1/1000℃のところで超流動という状態になる。普通物が流れる場合、何らかの力をそこに加えなければ流れないのだが、超流動の状態でＨｅ３は摩擦も起こさずに力を加えなくても流れる。超伝導の研究もあわせてやっている。理論なので主に紙の上での計算で実験はしていない。

☆始めようと思ったきっかけは?

Ｈｅ３が超流動になった時期と研究を始めようとした時期が一致したから。大学院博士課程の３年生の頃から今日に至るまでずっとやっている。熱中するときは本当に楽しくてやめられない時もあった。同じ研究テーマのライバルとの競争も刺激になっていた。

☆大学生時代の様子は？

わだつみ会というサークルに所属していた。学徒動員の残した遺稿を編集した人が中心になってつくった組織の支部が大学にあり、今でいう平和運動のようなことをしていた。入ったきっかけは、中学のときの安保闘争や、大学でも毎日叫んでいる人達の影響を受けて。そのころは専門にしようとは思わなかったけど、数学が好きでよく専門書を読んでいました。アルバイトは家庭教師をしていた。

☆趣味は？

碁。あと、ゲーム類は昔から好き。

☆今の学生に一言

結果はどうであれ、ぶ厚い本に取りかかってみる気持ちがほしい。どの分野でもその教科書を読むのは大切だから。あと先生の言っていることがわからないとき「それは習っていません」じゃなく、自分で調べる姿勢が欲しい。

☆総合科学部について

いろいろな分野の教官がいるからそれぞれ発想の仕方とかも違うし、そういう集まりの中で話し合いをしたりするのは大変だけれども刺激を受ける。本当はもうちょっとお互いに理解しあえる場が欲しい。授業は他学部に比べると受け持つ授業はちょっと多いが、それは苦にならない。それよりも会議（管理運営面での）が独立行政法人化の動きなどで忙しい。４月からはちょっと減ったが、ひどいときはほとんど毎日だった。

☆研究室の雰囲気は？

わりかし自由にやりたいことをやりたいようにやっています。

（取材：山下純、三浦和歌子）

於保幸正研究室

自然環境科学講座　教授　（C506）

写真右が於保先生

Q　研究内容は？

地質学を基礎にして、自然環境の成り立ちについて研究している。特に岩石の中にみられる割れ目がどのような過程で形成されたのか、その割れ目を使って、岩石はどのように風化してきたか、風化に伴って地形がどのように変化してきたか、などを調べている。また、過去の地殻の環境変遷についても研究を行っている。例えば、野外では地層としてみられる岩石があるが、これらがどのような環境で形成されたかについて知るために、野外調査を行っている。今後は文系の先生たちと共同で研究できることがないか模索したいと思っている。

Q　研究をしていて思われることは？

研究は、なんやかんや言いながらも、みんなで助け合っていると思う。それぞれの立場からの意見を聞くことで、気付かされることも多い。研究は独りで出来るものではない。

Q　学生の頃の先生は？

高校の頃は、シャイでもの静かでひたすら小説を読んでいた。試験の日は、学校が早く終わり、空いた時間に小説が読めるので嬉しかった（笑）。

Q　研究室の様子は？（研究室の方々にお聞きしました。）

ゆったりのんびりしていて、あんまりカリカリしていない。

於保先生は、穏やかで話のわかる人。

宮島や対馬の野外調査を行った。対馬での調査は、１週間くらいに及んだ。

Q　学生に一言お願いします。

学生を見ていると、バーチャルの世界に生きているみたい。自分の世界に閉じこもっている感じがする。もっと自分で考えて欲しい。そして、客観的に自分を観る力を身につけて欲しい。自分を別の観点からみつめられるようになって欲しい。そして、行動をおこす前に行動後のことを想像できるようになったらいいと思う。もっと汗水たらして自然を見て欲しい。

（取材：岡本彩　木島静香）

小川泰生研究室

言語文化研究講座　助教授（A525）

先生の研究内容を教えて下さい

中国語と日本語の対照比較です。例えば、主語は日本語では良く省略されますが、中国語ではそんなに省略されないのですよ。日本語では主語が曖昧になっていることも多くて、日本の文献が中国語に翻訳されたとき、主語が間違って訳されていたりするんです。そんなことを発見して、指摘するのが楽しいですね。

研究を始めたきっかけはなんですか?

大学一年生のときに学生訪中団で中国に行ったことがすべての始まりかな。中国に興味をもち・・。もちろん興味だけではなくて少しでも世のため人のためになっていることを実感することでモティベーションを高めています。中国語を習う日本人にも、日本語を習う中国人にも自分の研究が活かせられたらいいと思っています。大学に残ろうと思ったのもやっぱり研究がしたかったからなんです。

先生の学生時代のことを教えて下さい

普通の学生でしたね。単位を落とさない程度にほどほどに遊んでいました。中国に興味を持ってからは中国語をかなりがんばっていましたね。あと卓球も好きでよくやっていました。でも今から思うと、もっとこうしておけばよかったなどと後悔することもあるんですが…（笑）

先生はよく中国へ行かれるそうですが、面白い体験談などありますか？

中国に行ったらやっぱり“値切り”が楽しいですね。“不要！不要！”と言っているだけで値はどんどん下がっていくんですよ。いつか山東省である商品を120元から20元にまで値切ったことがあります。'95年から'98年と毎年学生を連れて中国に行っていますがついつい日本でもその癖で値切ってしまうんですよ。

日中の学生の違いはなんでしょうか？

中国の学生はとにかく勤勉ですね。夏休みでも大学の図書館は学生でいっぱいなんですよ。中国ではクーラーの普及が日本より遅れていることもあるかもしれませんが、それにしても日本の学生が夏、家で勉強しているかといったら疑問ですね～。

先生の趣味はなんでしょうか？

無芸大食なんですよ～。あえていえば“中国全般”ですね。中華料理を作ったり食べたりすることが大好きです。美味しいお店いっぱい知っていますよ～！！あと学生時代から続けて卓球もたまにやっています。スポーツは結構好きですよ。

教官になってよかったと思うことってありますか？

わたしは学生との接触がとても好きなんですよ。教師は人と人のつながりを実感できる素晴らしい仕事だと思っています。卒業後も訪ねてきてくれたり、「先生」と声をかけてくれたりなんかした時はとてもうれしくて、教師冥利につきますね。

プログラム制移行についてどう思いますか？

以前同様がんばっていきたいとおもっています。コースでもプログラムでも言語の楽しさを教えていきたいですね。

学生にメッセージおねがいします。

学生時代には自分の能力を高めてほしいですね。どれだけ高められるかが学生時代の課題です。スポーツで自由に動くには頭で考えるだけでなく練習が必要。頭も同じなんですよ。自分の能力を信じてどれだけやるかが大切なんです。“鉄は熱いうちに打て”というようにみなさんは今“熱い”んですよ。広大は図書館も素晴らしいし、環境をとことん利用しましょう！！自分から学ぶという姿勢をもとう！！今の学生は昔と比べて積極的で、勇敢なようにも感じるんです（もちろんよい意味で）。やろうと思っているだけではだめで、実際に行動していく力をもっとつけていきましょう。努力できることも立派な才能なんですよ。

ここで中国の故事を一つ。「身在福中不知福」（身は福中に在れど福を知らず）訪ねてきた学生は大歓迎です。質問はどんどん自分からしていきましょうね。

（取材：清水直子、竹田慶）

宮尾淳一研究室

数理情報科学講座　助教授（C615）

写真右が宮尾先生

先生の専門分野と現在の研究内容を教えて下さい

専門分野は情報工学で、その中でもコンピューターソフトウェアに関する研究をしています。もう少し、具体的に言うと、視覚言語と呼ばれる絵文字を使ったコンピュータの言語とか、マルチメディアシステムをどのように作るかという研究を行っています。

大学時代の専攻を教えて下さい

大学学部時代は、工学部で電気工学、大学院ではシステム工学の専攻でした。やっていた内容は、名前から受ける印象とは少し異なり、コンピュータのデータベースに関連する研究です。

研究を始めたきっかけは何ですか？

コンピュータが好きで、興味があったからですね。今の学生さんにとって、テレビゲームやコンピュータは全然珍しくないでしょう。しかし、当時のコンピュータは今のものと比べて非常に能力は低かったけれど、いろいろなことができる可能性を秘めているようで面白そうだったのです。

将来の夢、これからの目標をお聞かせ下さい

現在、コンピュータの計算能力は非常に高くなっています。その計算速度は皆さんの想像をはるかに越えています。でも、テレビのような動画に対してVHSのビデオと同様に、録画、再生、早送りなどを行うのは易しくありません。原因は莫大なデータ量と処理時間の厳密さです。今後、音声や動画を含んだマルチメディアの普及に伴って、このような処理が増えてきます。しかも、システムの形態は、コンピュータと多くの家庭電化製品が携帯電話と一緒にネットワーク化されたものになるでしょう。そこで、私の研究はこのようなシステムにおいて、待たされることなく情報交換が行え、きれい、かつ、スムーズに表示できるようにすることです。キーポイントは、いくらコンピュータやネットワークが速くなっても、それだけではだめで、工夫が必要だということです。

大学生時代の思い出をお聞かせ下さい

僕はそれほど変わった事はやってないのだけれど、体が資本のところがあるから走ったりしていました。フェニックス駅伝に出たこともあります。もちろん順位はメチャクチャだったけれど、走ったあとの宴会が楽しかったですね。それから、工学部では6月の第1土曜日に駅伝があって、それに出るというよりも、半強制的に出場させられるんです。これも今となっては楽しかったですね。そういうことで、ときどき走ってました。体を鍛えておくことは重要で、体力がないと勉強や研究をやろうと思った時に体がついてこないのです。研究中には徹夜が続くとか、本当に体力いることがあります。また、企業に入って、いろいろな仕事をする時にも、やっぱり体力がいることがあるでしょう。よって、頭だけでなく体を鍛えておくことをお勧めします。

学生に対して一言お願いします

私は40歳を超えているのですけれど、その経験から言うと、他人から見てつまらないと思えるようなことでも、とことんやった人は、それが生きてくる気がします。月並みなことになりますが、総科の中の勉強に限らず、自分が何か興味が持てることを見つけて、とことんそれを追求して下さい。いつか室に入る日が来るでしょう。もう一つ、私の経験から言わせて下さい。車を運転する学生さんは、無理をせずゆっくり走って下さい。私は昔から安全運転(？) なのですが、ある日、「どんなに追い越しても、トロい車が必ずいる」という悟りを開き、それ以来ゆっくり走っています。悲しいニュースが流れないためにも、気をつけて下さい。

ゼミ生の研究を教えて下さい

今年の4年生は一人ですが、優秀な学生が来てくれました。彼の研究はネットワークにつながった機器のソフトウェア変更に関する研究です。これを一口で説明するのは難しいのですが、例えれば、エンジンを回したままピストンを取り替えるようなものです。

先生はどんな方ですか？

(研究室のゼミ生の方とその他3人の方に聞きました)

・口癖は「だからー」と「ちくしょう」
・お弁当は愛妻弁当
・雨の日は送り迎え
・緊張感がある
・わりと短気
・気分やといううわさがある
・家族思い
・研究に対してとても真剣である

(取材：滝波　雅子)